つなぎ 54

2018年秋号
平成30年10月発行
第14巻第3号
（通巻54号）

地域医療を考えるペガサス情報誌

特別編集

約束からの21年――シリーズ❸

患者さまが人生を取り戻すまで。

患者さまの
社会復帰を支援する、
ペガサスの
先駆的な試み。

「約束からの21年」シリーズでは、法人の理念である『ペガサスの約束』を制定してからの軌跡を追ってきた。第一弾では、馬場武彦（社会医療法人ペガサス理事長）の思いや実践を中心に。第二弾では、患者さまが生活を取り戻すまでの仕組みづくりについてレポートした。第三弾であり、シリーズの完結編である今号は、ペガサスの就労支援の取り組みをテーマに展開する。

『ペガサスの約束』というぶれない軸を定めた馬場は、急性期から回復期、慢性期、そして、在宅まで患者さまを支える仕組みづくりに全力を注いできた。その先にあるゴールとして、馬場が見つめるのが、病気や障害を抱えた患者さまが生活に戻るだけでなく、〈仕事を持って社会に復帰すること〉である。人は仕事を持つことで、社会との関わりを持ち、やりがいを見出すとともに、生活するための収入を得る。だが、社会における障害者雇用の門戸は、まだまだ狭いのが実情である。そこで馬場は、まずはペガサスグループで就労できる体制を整え、障害を持ちながらでも働ける場所を積極的に提供していった。

こうした取り組みが示すものは何だろうか。それは、医療機関が果たすべき役割の拡大ではないだろうか。かつて医療機関は、単に病気を治すことを目的にすればよかった。しかし、今は単なる治癒ではなくなっている。治療と同時に、病気や障害を抱えながら生きる人を、支える役割が期待されているのだ。馬場はそうした社会の要請を的確に受け止め、〈治し支える〉という役割を先駆的に果たそうとしているのだ。

●

今いちど、『ペガサスの約束』を見てみよう。約束は、こんなフレーズから始まる。――すべての真ん中にいるのは、患者さまです。はりつめた瞬間（とき）も、案ずる時間（とき）も、そしてゆるやかな日々（とき）も、ともに過ごします。――

馬場は次のように話す。「私たちは、この約束のなかで、入院中も退院後も、常に患者さまと〈ともに過ごします〉と、約束をしています。ですから、退院した患者さまの就労支援に取り組み、〈一緒に働きませんか〉と呼びかけるのも、自然の流れなのです。職員の間にも、〈患者さまとともに過ごしたい〉という意識が芽生え、少しずつ定着してきたように感じます」。

その成果のプロセスについて、順を追って見てみたい。

ペガサスの約束

すべての真ん中にいるのは、患者さまです。
はりつめた瞬間（とき）も、案ずる時間（とき）も、
そしてゆるやかな日々（とき）も、ともに過ごします。

すべてを支えているのは、人と、町とのきずなです。
どこから見ても、誰にでも、よくわかる病院であり続けます。

ふるえる心に、よりそい。
待ちわびる思いへ、語り。
新たな願いと、手をたずさえ。

一つひとつの生命（いのち）を、まっすぐにどこまでも見つめていきます。

ペガサスの就労支援、その出発点。

障害や病気とともに生きる地域の方々に、仕事のチャンスを提供しようとするペガサス。この取り組みの出発点は、実は20年以上前にさかのぼる。当時、20代の若さで障害を持ち、絶望の淵からそれぞれの社会復帰を果たした二人のケーススタディを紹介する。

仕事中に、脊髄を損傷。

最初に紹介するのは、ペガサスクリニックで医療事務に従事する大橋 正である。大橋が車椅子の生活になったのは、今から28年前のこと。当時、20歳だった大橋は、運送会社で働いていた。フォークリフトを運転しているときに車体が横転し、運転席から投げ出された。救急車で馬場記念病院に運ばれたが、脊髄損傷と診断。その後、脊髄の麻痺進行を極力抑えるための治療が行われたが、下肢が動くことはなかった。入院期間は、褥瘡（じょくそう：床ずれ）のための再入院も含めて、約4年間に及んだ。

「一生、歩けないと知ったときは、絶望感に打ちひしがれました。若かったこともあり、看護師さんを困らせることも多々ありました。もう死にたい、と当たったり、食事や薬を拒否したり…」と振り返る。このとき、理学療法を担当したのが、田中恭子（理学療法士。現：法人本部・リハビリテーション管理部部長 兼 馬場記念病院・事務部部長）だった。「田中さんはとにかく日常生活に困らないようにしよう、と、すごく熱心にやってくれました。地下の駐車場のスロープを車椅子で上がる練習や、堺東の駅に行って、改札からホームに移動する練習もしましたね。鬼軍曹みたいな感じで、スパルタでしたよ」と大橋はいたずらっぽく話す。

退院後、建築士をめざすが…。

退院が近づくと、大橋は車椅子でもできる職種のなかから、建築士を志望するようになる。院内の医療ソーシャルワー

カーに相談したところ、障害者が通える千葉の専門学校を紹介してくれた。大橋は退院後、その専門学校に入学。卒業後は地元に戻り、工務店に就職し、設計の仕事をしながら、2級建築士の資格取得に挑戦した。第二の人生が順風満帆に始まったように思えたが、それからほどなくして工務店の業績が悪化。大橋は辞めざるを得なくなった。

退職後は、ハローワークに通う日々だった。当初は、建築設計の仕事を探したが、資格がまだ取れていないこともあり、再就職への挑戦は非常に厳しかった。

「建築にこだわらず、もう少し職種を広げてみようか」。そう考え出した矢先、偶然、田中から連絡が入り、久しぶりに食事をともにした。大橋は入学、卒業、就職など、人生の節目節目に田中と連絡を取り合い、交流を続けていた。

ひと通りの話を聞いた田中は「それなら、うちで働きませんか?」と提案。当時、ペガサスでは、ペガサスクリニックを立ち上げるタイミングで、人材を募集していたのである。後日、面接を受けた大橋は「何でも頑張ってやります」と熱意をアピールし、現職に採用された。

理事長の馬場は当時を振り返る。「大橋君は障害者雇用の先駆け的な存在でした。当時はまだ院内のバリアフリー環境も整っていなかったものですから、不便をかけて申し訳ないと思ったことを覚えています。逆に、彼の入職のおかげで、院内のバリアフリー化を進めるきっかけができた、と言っていいかもしれません」。

妻と母と愛犬と暮らす、穏やかな日々。

大橋は今年で、勤続17年になった。「上司はもちろん、同僚の皆さんもいつも体調面を適度に気遣いして、助けてくださっています。僕の立場からすれば、本当に仕事をさせてもらえるだけでありがたいなと感謝しています。これからも、自分でできることであれば、〈何でもやらせてもらおう〉と考えています」と話す。

大橋は、妻と母親と3人暮らし。そこに昨年、新しい家族が加わった。愛くるしいポメラニアンである。仕事から戻り、「愛犬と遊んでいるときがいちばん楽しい時間」。大橋はそう言って、にこやかに笑った。

20歳で脳の病気を発症。

二人目に紹介するのは、母親が営む居酒屋を手伝う上田尚美さんだ。

尚美さんの体に異変が現れたのは、成人式を終えた20歳のときだった。頭痛と手足のしびれを感じ、近隣の病院を受診したところ、脳出血が見つかった。2週間ほどの入院で、出血が治まったため退院。普通の生活に戻ってしばらくし、二度目の脳出血を起こし、今度は馬場記念病院に救急搬送された。

診断は、先天性の血管疾患を原因とする脳動脈瘤の破裂。出血を止めるために、すぐさま開頭して血管の手術が行われた。手術後、尚美さんの意識はなかなか戻らなかった。母親は当時を振り返る。「意識が戻るまで3～4カ月かかりました。麻痺のない左手を握りながら、『お母さんやで。わかったら、手を握って』と話しかけ、弱い力で握り返してくれたのが、最初の意思疎通でした」。

それから尚美さんは徐々に、生きる力を取り戻し、約8カ月の入院生活を乗り越えた。後遺症は、右片麻痺と失語症。だが、熱心なリハビリテーションの成果もあり、右足に麻痺はあるものの、歩けるようになっていた。

就労に向けて準備をスタート。

退院した尚美さんは週3回、馬場記念病院の外来リハビリテーションへ、月に1回、主治医である馬場の診察を受けるために通うようになった。馬場は当時を思い出してこう語る。「退院後も一生懸命、訓練して、かなり回復されていったと思います。まだまだ人生は長いの

で、頑張ってほしい、と願っていました」と話す。

そんな通院生活が1年以上続いた頃、当時リハビリテーション部の部長だった田中恭子は、尚美さんと母親にある提案をした。「お母さん、以前、尚美さんがお店を手伝えるようになってほしい、と言っていましたね。そのためには、もっと体力や持久力をつける必要があります。社会復帰の第一歩として、当院にボランティアスタッフとして通いませんか」。この提案は、社会復帰に不安を覚えていた尚美さん、母親にとってありがたい申し出だった。二人はすぐに「お願いします」と頭を下げた。

尚美さんは1日3時間くらい、馬場記念病院のリハビリテーション室で、掃除やテーブル拭き、コーヒーを淹れる仕事を始めた。たくさんの職員と関わることで、尚美さんは社会参加への意欲を増し、少しずつ体力をつけていった。

お店の常連客と軽口を交わす。

馬場記念病院でのボランティア経験からしばらくして、尚美さんはいよいよ念願だったお店の手伝いを始めるようになった。すでに発病してから5年ほどの歳月が流れていた。最初の頃はただお店の隅に座り、にこやかにしているだけだったが、やがて生ビールや酎ハイの注文に応えるなど、お店の戦力となっていった。尚美さんは右手に麻痺はあるが、左手で器用にいろいろなことをこなす。ビール瓶のふたも、ワンタッチで開けられるオープナーを用いて、手際よく開けた。

尚美さんは今、お店の営業日はほぼ毎日、カウンターに入る。常連客と軽口を交わす姿はほほえましく、お店の雰囲気を盛り上げている。

一人の理学療法士の情熱。

二人の物語は、まだ「就労支援」という言葉が馬場記念病院に周知されていない頃のできごとである。一人の理学療法士、後に病院運営の中枢に携わる田中の情熱が、二人の社会復帰を強力に後押ししたのである。すなわち、ペガサスの就労支援は、組織全体というよりも、個人技によって最初の一歩を踏み出したといえるだろう。

田中は振り返る。「私自身は、理学療法士として当たり前のことをしただけで、あまり特別なことをした、という意識はないんです。セラピストの役割は、患者さまに障害が残ってもその方らしい生活をお手伝いすること。仕事をしたいという方は、仕事を通じて、イキイキとした生活を取り戻してほしい。そのために、私たちにはどんなお手伝いができるのかをいつも考えて、トライしていましたね」。

当時は、ペガサスのリハビリテーションを確立するために、さまざまなことを試みた。「退院した患者さまに、ボランティアスタッフとして通っていただくのもその一つですね。そうしたチャレンジを、現在の多様な取り組みに繋げてきました。今思えば、試行錯誤していたリハビリテーション部を、広い度量で見守ってくださった馬場理事長には感謝しています」と田中は笑みを浮かべる。

ペガサス就労支援プログラムを活用して社会復帰を果たす。

ペガサスでは現在、就労を希望する方に「もう一度お仕事しませんか?」と声をかけ、意欲のある人を積極的にペガサスグループへ迎え入れている。さらに、スムーズな就職を後押しするために、ペガサス就労支援プログラムも用意している。このプログラムを活用し、社会復帰を果たした二人の事例を紹介したい。

デイケアで介護に携わる。

ペガサス通所リハビリテーションセンターで、明るい笑顔でご利用者を迎える女性がいた。平成28年9月に入職した、白石実子である。白石は、スタッフたちと手分けして、ご利用者のバイタルを測ったり、お茶を出したり、カルテを記入したり…といった一連の業務に携わっている。ただ、右半身の麻痺の後遺症が少しあり、重いものを運んだり、しゃがんだりすることはうまくできない。「できないことがあると、『誰かお願いします』という前に、周りの方が気づいて助けてくださいます。私の得手・不得手をよくわかってくださる周囲の

方々の支えがあるから、何とか勤まっています」と謙虚に話す。

突然の脳出血で2カ月入院。

白石が現職についたのは、平成28年に発病した脳卒中がきっかけだった。夜間、突然気分が悪くなり、トイレで吐いた直後に意識を失って倒れ込んだ。夫のつきそいで馬場記念病院に救急搬送。脳の血管が破れて出血が起こる脳出血で、即座に血圧を下げるための点滴治療が行われた。

一命は取り留めたものの、右片麻痺と言語の障害が残った。ただ、回復期リハビリテーション病棟（南館）に移ってからの回復は目覚ましかった。右足の動きは少し悪いが、杖なしで歩けるようになり、右手も少し動かせるようになった。

アナウンサーに戻れないという現実。

障害のなかで白石が最も苦しんだのは、言語だった。実はそれまでの職業は、フリーランスのアナウンサー。よく通る澄んだ美声を活かし、テレビのニュース番組をはじめ、テレビショッピング、公営競技の場内アナウンスなど、多方面で活躍していた。ところが、発病後は言葉が出にくくなり、声のトーンも下がり、滑舌も悪くなった。30年以上やってきたアナウンサーの仕事に戻れないことを知り、白石は深い絶望感につつまれた。

退院後、白石はペガサス通所リハビリテーションセンターに通うようになった。この間に、少しずつ心のなかに変化が芽生えていったという。「アナウンサーに戻れないからといって、〈家の中に閉じこもりたくない〉と思ったんです。これから働くなら、介護もいいかもしれない。私が多くの方から元気づけられたように、今度は私が元気を届けられたら…と考えました」。こうして白石は、介護職へ関心を寄せるようになっていった。

ペガサス就労支援プログラムを活用して…。

ペガサスの介護事業所で働いてみよう。そう決意した白石は、かねてよりペガサス職員から案内されていた「ペガサス就労支援プログラム」に申し込んだ。そして、1カ月間、ボランティアスタッフとして働いた後、職員として正式採用された。

白石は今、デイケアで働くかたわら、ペガサスグループの職員運動会の司会を務めたり、日米ジョイントフォーラム（※）の進行役も担当した。「マイクの前で話す機会をいただき、うれしかったですね。これからも、本職は介護一筋でやっていきますが、ボランティアとして朗読や人形劇に携わるなど、声を活かした活動は続けていきたいな、と考えています」と明るく話す。

※ 社会医療研究所が主催、馬場記念病院をはじめ4団体が共催する、日本のヘルスケアの将来を考えるフォーラム。

ペガサスの就労支援システムとは。

ペガサスの就労支援システムは、ペガサスグループでの就労を希望する人がスムーズに仕事を始められるように支援するプログラムである。個々の相談に応じて、就労の問題点を洗い出し、職業トレーニングプログラムを立案。その後、ボランティアスタッフとして仕事にチャレンジし、希望の業務に必要な機能を獲得してから、ペガサス職員採用試験を受ける流れになっている。

このプログラムは田中の発案でスタートしたものだが、最初に相談を受けたとき、馬場は「これはいい。どんどん進めてください」と快諾したという。「当院を退院した患者さまが一緒に働いてくださったら、私たちにとっても勉強になるし、新たな気づきも得られるだろうと思いました」と馬場は話す。

数度にわたる手術、抗がん剤治療。

二人目に紹介するのは、大腸がんのステージ4から奇跡の社会復帰を果たした上村堅二だ。ペガサスデイサービスセンター石津に勤務し、介護の仕事に従事している。上村が現職に就いたのは、平成29年9月。それまで2年以上にわたり、闘病生活を送ってきた。最初は下痢が治らず、近所のクリニックを受診した。単なるストレスだろうと軽く考えていたが、すぐに馬場記念病院を紹介され、消化器科を受診。検査の結果、大腸がんと診断された。すでに肝臓にも転移しており、ステージ4だった。

直腸に大きながんがあったため、便が詰まって大腸が破裂する「腸閉塞」の危険性があった。そこで、まずは直腸のがんの一部を切除する手術が行われた。このとき、取り残したがんは、抗がん剤で小さくしてから切除する計画であった。退院後、抗がん剤治療が始まった。2週間に一度、病院で4時間くらい点滴を受けた後、針をつけたまま、点滴容器を首からぶら下げて帰宅。それから、2日間、点滴を続ける。薬の副作用のために、味覚も嗅覚も変わり、口の中には口内炎、顔には湿疹ができ、髪の毛も抜けた。約半年間の苦しい治療を乗り越えてみると、がん細胞は驚くほど小さくなっていた。

上村は再び入院し、小さくなった大腸がんと肝臓がんを切除する手術を受けた。さらに数カ月後、一時的に造設していた人工肛門を閉鎖し、温存していた肛門の一部（外側にある外肛門括約筋）を用いて排便できるようにする手術を受けた。こうして、上村はようやく入院治療のすべてを終了した。

「生かされている」という発見。

辛い闘病生活を、上村はこう振り返る。「最初、告知されたときは、人生終わりやなと思って落ち込みました。ただ、手術が終わり、看護師さんに献身的にお世話してもらい、〈自分は生かされているんだ。頑張って生きていかなくては〉と、気持ちを切り換えました」。

抗がん剤治療中も、温かく励ます看護師の存在に救われたという。「あるとき、看護師さ

んが、『元気になったら、何をしたいですか』と聞いてくださったんですね。それで、自分の心に問いかけると、やはり〈仕事がしたい〉と思いました。ただ、以前やっていた鳶職は体力的に無理だろう、と。それならば、看護師さんのように、誰かを支える仕事がしたい、と思うようになりました」。

そんな思いを打ち明けた上村に看護師が提案したのが、ペガサスの就労支援プログラムだったのだ。

目標は、介護福祉士の資格取得。

就労支援プログラムの流れにそって、上村はまずはペガサスデイサービスセンター石津北で、ボランティアとして事務職を体験した。最初の頃は、排便コントロールがうまくできず、トイレが心配だったが、やがてそれもうまくできるようになった。この仕事で自信をつけた上村は、ペガサス職員採用試験を受け、採用された。

現在、上村の一日は、ご利用者のお部屋（ペガサスロイヤルリゾート石津）にお迎えに行くところから始まる。「ご利用者と一緒にレクリエーションを楽しんだり、食事やトイレ、お風呂を介助したり…。一日はあっという間に過ぎていきます。ご利用者から『ありがとう』と言っていただけるのが何よりの喜びです」と、笑みをこぼす。

上村は日々、業務のかたわら、勉強にも力を入れる。認知症介護の本や介護術の本を買って、介護の基本を学んでいる最中だ。「介護実務の経験を積んで、ゆくゆくは介護福祉士の資格を取るのが目標です。がんの病気はいつ再発するかわからないので、その心配もあります。だからこそ、何でもチャレンジしていきたいと思います」と明るい表情で語った。

患者さまの社会復帰を強力に後押ししていく。

個人技だった就労支援を、組織全体へと発展させてきたペガサス。さまざまな困難に出会うたびに衆知を集めて課題を解決し、就労支援の仕組みを築き上げてきた。そのプロセスを振り返ってみたい。

就労支援を職員全員の意識へ広げる。

一人の理学療法士の情熱から始まった就労支援が、今や組織全体の仕組みになった。今では職種にかかわらず、看護師なども「一緒に働きませんか」と、積極的に声をかけられるようになった。

その過程には、何があったのだろうか。馬場に聞いた。「きっかけは、ペガサスグループの職員数の増加です。ご承知のように、国は、障害者雇用促進法を定めており、民間企業や地方公共団体などは、従業員数の一定の割合以上の障害者を雇用することが義務づけられています。私たちの組織も、人数の拡大とともに障害を持つ方を、より積極的に雇用していく必要がありました。それならば、優先的に、退院した患者さまに呼びかけようと考えたのです」。

馬場記念病院は、地域の脳卒中患者さまを一手に引き受けている。脳卒中を患った人は、片麻痺や言語障害などの後遺症が残りやすい。治したくても治せない。仕事に戻りたいけれど戻れない。そんな人に雇用のチャンスを提供しようというのだ。それは、脳卒中センターを持つ馬場記念病院の使命でもあった。

障害者と健常者がともに働く難しさ。

こうして退院患者さまの雇用を進めてきたペガサスだが、現実にはさまざまな困難が待ち受けていた。身体に障害を抱える方に、どんなふうに接すればいいのか。どこまで仕事をお願いできるのか。現場サイドが大いに戸惑ったのである。

「たとえば、仕事が進まない場合、障害が原因なのか、本人のモチベーション低下が原因なのか、わかりにくい。そこで、障害を持つスタッフと職場のスタッフの橋渡しをする役割を、ペガサス地

域包括ケアセンターが担うようにしました。今では、センターの職員が障害を持つスタッフの担当者となり、さまざまな相談にのり、問題を解決するようにしています」と田中は説明する。

ペガサス以外へ、就労支援を広げるために。

さらにペガサスは、雇用のチャンスを地域へ広げるために、平成29年11月、グループ法人である社会福祉法人風の馬において、就労継続支援B型事業所GARO〈作業所雅老〉を開設した。就労継続支援B型事業所とは、現時点で、社会で働くことが難しい人に対し、働く場所を提供するものだ。

田中は話す。「もともと就労への準備を進める施設として、この地域にもっと作業所があるといいね、という話が院内スタッフから上がっていました。それをようやく実現することができました」。GAROの名付け親は、馬場である。「事業継承する前の〈雅老園〉という名称を踏まえつつ、いわゆる作業所らしい平仮名の名前にはしたくなかったんです。一般企業としても通用するようなシャープな名前にすることで、いずれは普通の企業と同じようなレベルの高いワークスペースになってほしい、という願いを込めました」（馬場）。

明るい雰囲気のGARO。

実際にGARO〈作業所雅老〉を訪ねると、20人ほどのご利用者が、お菓子の包装作業に従事していた。脳卒中などにより後遺症を持つ人も多いが、時折冗談が飛び交い、雰囲気はとても和やかだ。

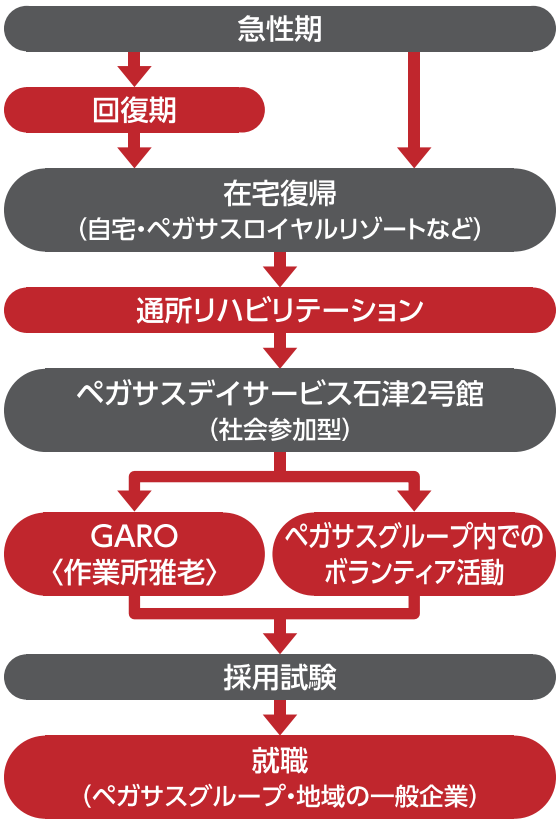
サービス管理責任者の関口正夫に話を聞いた。「見学に来られた方は皆さん、明るい雰囲気ですねとおっしゃいます。ご利用者の大半は、病気になるまで仕事を持っていたので、コミュニケーション能力が高いからだと思います。また、自ら進んで〈働く〉ということは、人を輝かせる力があります。工賃は決して高くないですが、収入がモチベーションとなり、皆さん、明るい表情で作業していらっしゃいます」。

ペガサスグループの強みを生かす。

GARO〈作業所雅老〉の強みは、ペガサスの医療チームがバックにあることだ。たとえば、作業内容によって困難な動作が生じた場合、馬場記念病院の作業療法士が駆けつけ、ご利用者の機能を評価し、どうすれば作業できるか、アイデアを出す。その他、作業療法士はご利用者の身体機能や高次脳機能などを評価し、就職するためにはどんな職業トレーニングが必要かを提案している。

今後の目標はどんなことだろう。「やはり地域で就労支援の実績を作っていくことですね。すでに40代の女性で、一般企業の事務職に就職が決まった方がいらっしゃいます。この方は脳血管障害で車椅子を利用するようになった方ですが、ここに通うことで体力的に自信がついたとおっしゃっています。こういう成功事例をもっともっと作っていきたいですね」と関口は意欲を燃やしている。

患者さまが仕事を取り戻すまでの流れ（脳血管障害の患者さまの場合）



原点にいつも、ペガサスの約束。患者さまの人生を輝かせるために。

退院する患者さまに、「もう一度お仕事しませんか?」と呼びかけ、就労支援に力を注ぐペガサスグループ。その根底にはいつもペガサスグループの理念を表した『ペガサスの約束』があった。

仕事を持つことで人生の喜びを。

そもそも今日のように患者さまの就労支援に力を注ぐようになったベースには、どんな思いがあったのだろうか。改めて理事長の馬場に話を聞いた。「当院の患者さまの中心は、脳卒中の方々です。そのなかには、若年性の脳卒中の患者さまもかなりいらっしゃいます。もともと障害を抱えて退院していく方々が、その後も困らないように、私たちは退院後の継続ケアに力を入れてきました。でも、あるときから〈在宅復帰〉に満足してはいけない、と思うようになったのです。やはり人は、仕事を持ち、社会と関わりを持つこと

で、生きがいを見出します。もちろん退院する人全員が、仕事を取り戻せるわけではありませんが、可能性のある方はぜひ仕事を持ち、豊かな人生を築いてほしいと考えました」。

就労支援に力を注ぐ過程で、ペガサスはGARO〈作業所雅老〉の運営にも着手。福祉の領域へと、事業の裾野を大きく広げてきた。これは、平成22年に設立されたグループ法人である社会福祉法人風の馬の事業展開である。馬場は社会福祉法人の立ち上げについて、次のように語る。「私自身は、社会医療法人という立場でも、患者さまの退院後の生活復帰・社会復帰に関わっていいのではないかと考えていました。なぜなら、社会医療法人は公益性の高い医療サービスを担う法人だからです。しかし、現行の法律を見ると、どうもそこまでサービスを広げることができない。そうであれば、組織の形態を整える以外、道はありません。私たちが医療・介護・福祉の連携を広げていく上で、社会福祉法人の設立は必然であったと思います」。

すべては『ペガサスの約束』を果たすために。

患者さまのスムーズな退院を支援し、退院後も途切れることなく医療や介護サービスを提供し、さらに今や就労支援にも力を注ぐペガサス。患者さま、ご家族のニーズに次々と応えることで、ペガサスグループは堺市を中心とした地域に、医療・介護・福祉の翼を広げてきた。今日のような事業の広がりの原点にあるもの。それは、『ペガサスの約束』に他ならない。

冒頭で紹介したように、『ペガサスの約束』では、「入院中も退院後も、常に患者さまに寄り添っていくこと」を明言している。今でこそ、退院後のフォローに力を入れる病院が増えてきたが、二十数年前に、そのことを病院の理念に表したところは例を見ないのではないだろうか。「そうですね。継続ケアを理念とすること自体、珍しいかもしれません。ただ私たちは、脳神経外科を柱にする病院として、時間軸で患者さまを支える重要性を自覚していました。当院の存在意義を語る上で、継続ケアは欠かせないポイントだったのです」と馬場は振り返る。その先見性と独自性からだろう。一般に、企業や病院の理念は、20年も経つと、実態にそぐわなくなり、見直すところも多いが、『ペガサスの約束』は今もなお、色褪せたり、陳腐になることはない。

「『ペガサスの約束』は、時代の変化に左右されない普遍的なメッセージだと自負しています。だからこそ、職員の皆さんもその内容を理解し、共感して、一緒にチャレンジしてくれているのだと思います。私たちはこれからも、患者さまを真ん中に、気持ちを一つにして、さらなる進化を遂げていきます」。馬場は力強い口調でそう締めくくった。

Second edition

医療から、そして、看護、介護から、地域社会を支える人々。

ペガサスは、地域の診療所、そして、看護、介護に関連する事業所と連携をしています。
診療所は、地域の皆さまにとって、医療を受ける「最初の窓口」。丁寧な診察による適切な診断・治療を行い、また、病院の紹介を通して、患者さまの「かかりつけ医」として、健康状態を総合的に管理してくれます。
看護、介護に関連する事業所は、在宅で療養する皆さまの「パートナー」。
ご本人はもちろん、ご家族の毎日を支えたり、快適な生活の場そのもののご提供により、皆さまを支援します。
第二特集では、こうした診療所、事業所をご紹介していきます。※診療所（アイウエオ順）、そして事業所の順でご紹介しています。

診療所

検査・診断から手術、その後の治療まで、一貫して対応できる消化器・乳腺外科。

院長の高度な技術で手術も請け負う新時代のクリニック。

消化器がん、乳がんなどを迅速な検査で早期発見。

堺市北区は市内でも人口が増えており、若い世代が比較的多い町だ。この地に平成29年7月にオープンしたのが、やまもと消化器内視鏡・外科クリニック。扉を開けて待合室に一歩足を踏み入れると、ホテルのようにホスピタリティに満ちた上質な空気感がただよう。

院長の山本 篤医師は、これまで大阪市内にある急性期病院の消化器外科・外科の指導医として豊富な実績を積んできた。クリニックを開業したのは、病院で診療所からの紹介患者さまと接するなかで芽生えた思いがきっかけだったという。「患者さまは、自分の病気についてあまりわかっていない方が多かったんです。もっと診療所の段階からしっかり検査して、患者さまに病気や治療のことを理解していただけるようにしたい。そして、病気を早期発見して治療に繋げたいと考えました」と話す。その言葉を裏づけるように、同クリニックは、検査メニューが実に豊富だ。経鼻内視鏡検査、腹部超音波検査、乳腺超音波検査、血液検査（貧血、炎症反応など）、ピロリ菌呼気検査、レントゲン検査は初診当日に検査を行い、結果を患者さまに伝えている。検査前受診の必要な大腸内視鏡検査においても、検査で切除できる大きさのポリープが見つかれば、その場で治療まで行う。検査・治療のスピード感は、卓越しているといえるだろう。「この1年間だけでも、胃・大腸がんやポリープ、乳がんなどを数多く発見しました。これからも迅速な検査で、早期発見に努めていきたいですね」と院長は話す。

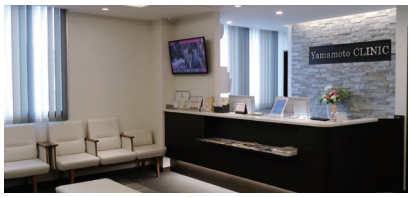
患者さまの安全第一にわかりやすい医療を。

山本院長は、「消化器内視鏡専門医」「外科・消化器外科専門医」であり、さらに緻密な腹腔鏡手術（数カ所の小さな穴から腹腔鏡というカメラと手術器具を挿入して行う手術）の技術を持つ「日本内視鏡外科学会技術認定医」でもある。その確かな腕を見込まれ、大阪市内の急性期病院で非常勤医師も務めている。

こうしたバックボーンを活かし、検査で病気の見つかった患者さまが希望すれば、院長自らが執刀しているという。「非常勤を務める病院のスタッフや設備を用いて、手術を行っています。この1年間で胃がんや胆のうがん、乳がんの切除術を5例ほど行いました。退院後は当ク

リニックに通院していただき、抗がん剤なども含めた継続治療を行います。検査から手術、その後の治療まで一貫して診ていくことができるので、患者さまに安心していただいています」と院長は語る。

ここまで専門性の高い検査や手術を中心に紹介してきたが、同クリニックではもちろん、内科一般に幅広く対応。糖尿病など生活習慣病対策にも力を注いでいる。今後の抱負を聞くと、院長は少し考えて次のように答えた。「一番大事なことは、患者さまの安全です。安全確実に、わかりやすい医療を提供したいですね。それを継続することで、地域の患者さまから選ばれるクリニックになりたいと思います」。高い志を持って開業した「やまもと消化器内視鏡・外科クリニック」は、確実に地域の人々の信頼を獲得していこうとしている。



やまもと消化器内視鏡・外科クリニック
院長：山本 篤
所在地：大阪府堺市北区中百舌鳥町2丁2
TEL：072-275-9907
URL：https://yama-sec.com/
診療科目：外科・消化器科・リハビリテーション科・麻酔科

地域に根ざした有床診療所として外来・入院・在宅診療を幅広くカバー。

診療所

地域の高齢化に対応し、人生の最期に寄り添う看取りケアに力を注ぐ。

院長、副院長の2名体制で整形外科から内科まで対応。

平成19年の開設以来、現在地で歴史を重ねてきた銀杏会診療所を継承。平成29年6月1日に開業されたのが、よしざきクリニックである。院長の吉崎堅一医師は、かつて銀杏会診療所の院長を務めており、この地で診療を始めて6年の経験を持つ。「地域に根ざした医療を提供したい、地域で必要とされる存在になりたい、という思いで頑張ってきました。その思いは、よしざきクリニックに変わってもずっと同じです」と、院長は言う。

吉崎堅一院長（右）と中村宗浩副院長（左）

院長の専門は整形外科・外科。もう一人、副院長の中村宗浩医師が内科を専門として、2名の常勤医体制でさまざまな疾患やケガに応えている。「ご家族ぐるみでおつきあいのある方も多いですね。何でも相談できる〈かかりつけ医〉として信頼関係を築くよう努めています」と、院長は話す。

また、よしざきクリニックでは、通院が難しい高齢の患者さまのために、訪問診療・訪問リハビリテーションにも力を入れている。訪問診療では、院長・副院長に、非常勤の医師2名を加えた4名で対応。24時間365日、患者さまの急変時にいつでも駆けつけられる万全の体制だ。現在、訪問している患者さまは300名近くに上るという。

病院と在宅の橋渡しをする。

15床の入院ベッドを備えていることも、よしざきクリニックの大きな特徴だ。ここでは、急性期病院を退院したものの、すぐ自宅に戻れない方を積極的に受け入れ、日常生活動作を改善するためのリハビリテーションを提供している。理学療法士をはじめ、リハビリテーションに携わるスタッフは全部で12名を数える。「リハビリテーションに力を入れることで、いわば、病院と在宅の橋渡しをしながら、患者さまがスムーズにご自宅に戻れるよう支えています」と院長は説明する。

また、よしざきクリニックでは、ご家族の介護疲れを軽減する目的で一時的に患者さまをお預かりするレスパイト入院、在宅療養中に急変した患者さまの入院、看取りを前提とした入院にも幅広く対応している。とくに昨今は、地域の高齢化にともない、看取りのニーズが年々、高まっているという。「昨年1年間で、在宅での看取りと入院での看取りを合わせ、20名の看取りをお手伝いしました。これも、スタッフの理解と協力の賜物だと思っています」と、院長は話す。確かに、看取りをお手伝いするには、医師はもちろん、看護師などの職員にも大きな覚悟と負担が要求される。「スタッフみんなが〈この地域のためにお役に立とう〉という思いを共有しています。それが当クリニックの強みですね」と、院長は笑みを浮かべる。これからは、末期がんを患う方の看取りにも対応する計画で、今、準備を進めているところだという。総勢50名ほどのスタッフが同じ方向を向いて、病気とともに生きる患者さまをずっと支えていこうとしている。地域の人にとって、非常にありがたく、心強い存在だといえるだろう。

よしざきクリニック
院長：吉崎堅一　副院長：中村宗浩
所在地：大阪府和泉市上町661番地の1
TEL：0725-46-7600　URL：http://yoshizaki-cl.jp/
診療科目：整形外科・内科・リハビリテーション科
（訪問診療・往診・訪問リハビリ）

「堺市民を介護で困らせない」を合い言葉に幅広い介護福祉サービスを提供。

事業所

ご高齢の方々が、住み慣れたわが家で暮らしていけるように。

地域に密着して多様な事業を展開。

ケイエムシーケアセンターは、株式会社広栄（本社：堺市。自転車部品の製造等）を母体とする介護福祉事業の企業である。もともとは、親会社である広栄が50周年を迎えるにあたり、「これからは介護事業で、高齢化の進む地域に恩返ししよう」と考えたのが、介護領域に進んだきっかけだという。「弊社の企業理念は、〈人は人として生きる事こそ尊し〉。その志を持って、慣れ親しんだわが家で最期まで暮らしたいという方々の思いに応え、地域に密着した介護福祉事業を展開しています」。そう話すのは、センター長の小川絢也氏である。

地域の高齢者とそのご家族の思いに応えるために、ケイエムシーケアセンターは介護福祉事業の裾野を大きく広げてきた。「最初に始めたのは、ご高齢者の日常生活を支援する居宅介護支援と訪問介護サービスでした。そのなかで、ご利用者に必要なサービスがいろいろと見えてきて、自費サービス、訪問看護、介護福祉タクシー、そして福祉用具の貸与・販売、住宅改修も手がけるようになりました」。ご利用者、ご家族の相談に、まずはケアマネジャーがきめ細かく応え、適切なケアプランを立て、必要に応じて住宅改修や福祉用具のレンタルをお手伝いする。その後も訪問看護・介護・介護福祉タクシーなどのサービスを加え、日常生活をトータルにサポートしていく仕組みだ。「〈堺市民を介護で困らせない〉というのが私たちのモットーです。これから介護保険制度も変わっていくことと思いますが、私たちができる部分は全力で努めさせていただきたい。もちろん希望される場合は、看取りまでお手伝いさせていただきます」と力強く語る。

ニーズに応えて新しいサービスを次々と。

ケイエムシーケアセンターでは、高齢化が進む地域のニーズをとらえ、特色ある事業サービスを展開している。たとえば、福祉用具の「杖」は、地域最大級の品揃えを誇る。「杖というと、高齢者が使うもの、という無機質なイメージがあります。そうではなく、もっとおしゃれに使える杖があれば喜んでいただけるのではないだろうか。そう考えて、デザイン性を重視した1本杖、持ち運びに便利な折りたたみ杖など、多種多様なタイプをご用意しています」。また、おむつの無料配達も、喜ばれているサービスの一つだ。紙おむつ給付事業者として堺市に登録し、堺市全域を配送して回っている。「紙おむつはドラッグストアなどで購入すると、持ち帰るのが重くて大変です。ご自宅にお届けすることで、ご家族の負担を少しでも軽くしています」。

さらに、平成30年夏から新しく、ペット事業部も立ち上げた。「ご利用者から、飼っている犬猫が年老いて困っている、という話をよく聞くんですね。そこで、老犬・老猫の関節や毛艶サポート用のサプリメント販売を始めました」。地域の人の困りごとを解決するために、事業のサービスを次々と広げていくケイエムシーケアセンター。これからも、多様なニーズにフレキシブルに応えていく計画である。

ケイエムシーケアセンター
運営会社：株式会社ケイエムシー介護事業部　センター長：小川絢也
所在地：大阪府堺市中区深井沢町3261 ハイツ深井103
TEL：072-276-1333　URL：http://kmc-d.jp/carecenter/
事業内容：居宅介護支援、訪問看護、訪問介護・介護予防訪問介護、介護保険外サービス、福祉用具販売・貸与、介護福祉タクシー

つばさ 54
2018年秋号
平成30年10月発行第14巻第3号
（通巻54号）
地域医療を考えるペガサス情報誌

発行人　馬場武彦
編集長　塚本賢治
編集　ペガサス広報委員会　編集グループ
発行　HIPコーポレーション
社会医療法人ペガサス　〒592-8555　大阪府堺市西区浜寺船尾町東 4-244
TEL 072-265-5558　http://www.pegasus.or.jp/

つなぎ 54
地域医療を考えるペガサス情報誌

救急医療では、救える命は救う。
急性期医療は、最適・最善の治療を提供する。
回復期医療は、退院後の生活の確立を支える。
在宅医療では、生活全体の支援を切れ目なく提供する。
そのための医療の質の向上に、ペガサスは全力を注いできました。

そうした取り組みの年月を重ねれば重ねるほど、
患者さま一人ひとりの人生の重さを、
私たちは強く感じ始めました。
そして、その人生に、
少しでも関わりを持つことの責任の重さも感じました。
生命を繋ぐだけが、医療ではない。
治すだけが、医療ではない。
在宅に戻っていただくだけが、医療ではない。
すべての過程を見つめた上で、
〈どう生きるか〉に挑戦する患者さまとともに歩んでこそ、
私たちの存在価値がある。
ペガサスが見つけ出した一つの答えです。

「約束からの21年」。
それが22年になっても、23年になっても、
いえ、これから先もずっと、
私たちペガサスは、
『一つひとつの生命(いのち)を、まっすぐにどこまでも見つめていきます』。

社会医療法人ペガサス　理事長　馬場武彦

社会医療法人
ペガサス
Pegasus